

朝鮮通信使

朝鮮半島と日本との間には古くから政治的、商業的に強い結びつきがあったが、朝鮮王朝時代（1392～1897）になると、これらの関係はより正式なものになった。朝鮮国王は友好と通商を深めるため、日本の武士政権に定期的に使節を送り、対馬を統治していた宗家と特に頻繁に交流した。しかし、1590 年代に豊臣秀吉（1537-1598）の朝鮮出兵が勃発し、宗家もこれに参加せざるを得なくなったため、この関係は断ち切られた。

対馬の経済はもともと海外貿易に大きく依存しており、朝鮮半島との交流が途絶えたことは、島に壊滅的な打撃を与えた。秀吉の侵略が失敗に終わった直後、宗家は朝鮮との関係回復に努めた。秀吉の死後、徳川幕府が設立され、宗家は朝鮮王朝と新幕府の意見の相違を調整するために、公文書や印鑑を偽造することもあった。

このような努力の結果、朝鮮は 1607 年に定期的な使節団を復活させた。朝鮮は徳川に 12 回の使節を派遣したが、これは主に将軍継承の際に行われた。これらの使節団はすべて対馬を経由し、宗家が実務を担当した。1811 年の最後の使節団は、経費節減のため、江戸まで行かずに対馬ですべての公務をこなした。朝鮮は、徳川幕府が常時の外交関係を維持していた唯一の国であった。

500 人近くが参加した使節団の豪華さは、宗家の絵師が制作した 2 冊の絵巻物で表現されている。一つは 17 世紀のもので、朝鮮通信使が対馬藩の高官や護衛を従えて江戸に向かう様子が描かれている。もう一幅は、1811 年の使節団が宗の城下町（現在の厳原）を練り歩く様子を描いたものである。これらの絵巻は、対馬博物館と対馬朝鮮通信使歴史館で複製品とデジタル版を展示している。毎年 8 月に厳原で行われる「港まつり」では、朝鮮通信使を再現したイベントが開催される。